



▲原田学長の開会の挨拶

医学部で開催した「医学教育者のためのワークショップ」

医学部教務委員長 ◆ 井内 康輝

去る八月十七日、十八日の両日、医学部主催の第一回「医学教育者のためのワークショップ」が、メルパルク広島を会場に開催された。

従来、学生は、医師国家試験合格を目標に、知識偏重、しかも、想起型の問題に対応できる知識の習得のみを目標とした学習に走り、国家試験に合格

した段階の若い医師が、問題解決能力に欠け、情動面における欠陥をもつ傾向があることが指摘されている。

このような折に、昨年十二月に開催された文部省・厚生省主催の第二十回「医学教育者のためのワークショップ」に参加した筆者は、この時の体験により、医学教育者としての自らの過去を

大いに反省させられるとともに、現在取り組みつつあるカリキュラム改革に大いに有用であることに気づかされた。

そこで、この内容の一部でも医学部で開催できないかと考えたのが、今回のワークショップ開催に至った動機である。

以下はワークショップの概要である。

第一回ワークショップ 「カリキュラム・プランニング」開催

平成六年八月十七日、十八日の両日、医学部主催で第一回「医学教育者のためのワークショップ」を開いた。

ワークショップとは、本来、討議を重ねて「Product」を得ることであり、今回の企画も、主題を「カリキュラム・プランニング」として、一泊二日間の合宿で討議を重ねることで、参加者各人が自らの医学教育の改善に資する何らかの成果を得ることを期待して企画した。

同じ名称のワークショップは、文部省と厚生省が共催し、毎年一回富士山麓の研修所を会場に、全国の大学医学部および医科大学より二十名および教育指定病院から二十名、計四十名の参加者を募り開催されている。その目的は、医学教育の指導内容の改善に資するため、教育担当者が合宿して討議を重ねることで当面する問題の解決方法を探り、さらに、新しい教育の課題に対応する教育技法を身につけることにある。

いわゆる大綱化以降の 多様な改革

本学の医学部および医学部附属病院においては、平成三年の文部省の大学設置基準の簡素化（いわゆる大綱化）以降、二十一世紀に向けて医学・医療の一層の進展を図るために多様な改革がすすめられているが、とりわけ、平成六年度入学生より適用された六年一貫カリキュラムの円滑な実施が急務である。

医学教育は、永年、単位制ではなく時間制で運用され、旧設置基準による四千二百時間以上四千八百時間までの時間数と指定された科目別時間数の比率を守ってきたため、既存の講座の枠にとられない教育や、新たな分野に対する教育への取り組みに多くの困難を伴ってきた。

従って、今回のカリキュラム改革は、基本的には各講座のもつ科目では講義時間を減らして実習時間を増やし、さらに、高度に細分化された領域を統合し、かつ、その重複をさ

けて総合的講義科目を各講座の協力によって新設するところにある。

しかしながら、真の改革の主旨は、単に講義や実習の時間数や実施時期の変更によってかなうものではなく、教育指導の内容の改善や充実を図ることで達成されると考える。すなわち、医学教育を担う者自身の意識や手法の改革が必須である。

「学生は教官の 背中をみて育つ」

これまでの医学教育

ともすれば、これまでの医学教育においては、「学生は教官の背中をみて育つ」といった意識が強く、自分の専門領域の研究業績を誇らしく講義することによって学生は感動し、研究への意欲を持ち、これらが研究者、教育者として育つことを信じる教官が多いことは事実である。

臨床教育においても、実習を担当する教官は、診療や研究を含めた多忙さゆえに、実習

の効果を上げることができていない。

従って、学生は、医師国家試験合格を目標に知識偏重、しかも、想起型の問題に対応できる知識の習得のみを目標とした学習に走り、国家試験に合格した段階の若い医師が、問題解決能力に欠け、情動面における欠陥をもつ傾向があることが指摘されている。

こうした現状を打開するためには、進歩の一途をたどる医学の知識について、一定の講義時間枠で伝授していくことは不可能であることを教官は認識して、学生自身に勉学に対する意欲をもたせ、それを導く者としての教官の役割を果たすべく行動することが求められる。

さらに重要なことは、学生の勉学を知識、情意、行動の三つの面から妥当な方法で正しく評価してやる必要がある。残念ながら、医学部における教育には、こうした教育の原点に立ち返った思考とそれらを実践する技法が欠けていると言わざるを得ない。

ワークショップ開催の動機

筆者は、平成五年十二月に開催された文部省・厚生省主催第二十回「医学教育者のためのワークショップ」(五泊六日)に参加し、この指導にあたった日本医学教育学会の諸先輩との知己を得た。

この合宿によって得られた体験は、医学教育者としての自らの過去を大いに反省させられると同時に、現在取り組みつつあるカリキュラム改革に大いに有用であることに気づかされた。医学部の全教官がこの全国版のワークショップに参加することは不可能なので、この内容の一部でも本学医学部で開催できないかと考えたのが、今回のワークショップ開催に至った動機である。

幸いにも、日本医学教育学会から、尾島昭次(順天堂大客員教授、医学教育学)、岩崎榮(日本医大教授、医療管理学)、田中勸(防衛医大教授、外科学)の三先生の応援が得られた。さらに、広仁会(医学部同窓会、



▲小グループでの討論風景

平田敏夫会長)と広島大学医学部医師会(松浦雄一郎会長)から経済的支援を受け、かつ、医学部学務課の多大な事務的協力を得て、メルパルク広島(広島市中区紙屋町)を会場に本ワークショップを実行に移すことができた。

グループ討議主体のワークショップ

参加者は、医学部教官三十五名(医学科十三名、総合薬学科一名、保健学科一名)と臨床教育を担当する原爆放射能医学研究所教官二名の計三十七名(教授十二名、助教授七名、講師十四名、助手四名)であった。

第一日の午前九時半に開会し、調教寛治医学部長および原田康夫学長より激励のご挨拶をいただいた後、早速四つのグループに分かれて、「望ましい学習」を問題点としたグループ討議に入った。これは、参加者各人のこれまでの人生の中で印象に残った学習を图示し、まずグループ内で説明し、さらに全体討議を開いて、グループごとに代表から各人の語る



▲全体討議での発表風景

内容の説明を受けるものであったが、これは各人の持つ勉学に対する動機づけとなった事象を思い起こさせた。

次いで、「医学教育の問題点」と「医学教育に対するニーズ」について、小グループ討議と全体討議を繰り返したが、ことに後者は、自らの現在置かれた立場を離れて医学教育をみつめる機会となった。また同時に、小グループ討議の進め方とその有用性を再確認することにも繋がった。

その後、グループごとに授業科目の課題が具体的に提示され、そのカリキュラム作成に取り組んだが、その手順として、学習目標(一般目標と行動目標)の作成、学習方略の立案、教育評価の立案と、段階を追いながら小グループ討議による案の作成、全体討議での発表と他グループからの評価が繰り返され、その都度の修正によって、次第に内容の充実したカリキュラムが形成されていった。

その間、コミュニケーションゲームと称して、ゲーム形式によってグループ討議の有用性を具体的に体験するセッションや、欧米での臨床教育の実態のビデオ学習などをさみ、少ない時間の中で最大限の効果を得る日程が消化された。

また、非日常的な感覚での討論をめざして合宿し、さらに、役割をはなれて互いに「さん」付けで呼びあうことも大いに効果があった。

こうして、第二日の夕刻には「Early exit-posure(早期体験)」、「基本的臨床検査」、「感染予防」、「卒後研修入門」の四課題についてそれぞれカリキュラムが完成したが、その一部は、直ちに来年度から医学部のカリキュラムとして使用可能な内容を含むものであった。

ワークショップを終えて

このワークショップの内容の詳細は、十月初め、「第一回医学教育者のためのワークショップ」の記録と題して冊子を刊行したので、参照していただきたい(医学部学務課)。この中に、参加者に対して参加の動機やワークショップへの期待度についてアンケートした結果を載せているが、参加者の半数は上司からの強制などによって消極的に参加したことがわかる。しかし、終了後のアンケート結果では、こうしたワークショップ形式の教育方法について全員が「ある程度」、「かなり」、「きわめて」と程度差はあるものの効果的と答え、さらに今後ともこういうワークショップを開くことに対して、全員が「もつてもよい」、「もつ方がよい」、「是非もつべきである」のいずれかの表現をもって賛意を表している。従って、今後暫らくの間、医学部内において同様のワークショップを開き、カリキュラム改革に資するのみならず、医学部における教育目標に関する議論を深めることや、新任教官に対する情報提供の場として、このワークショップが利用されると思われる。

今日、全国規模で試みられている大学改革の主眼は、各大学の個性化にあると思われるが、このためには、大学あるいは学部における教官全員が一定の理念と目標をもち、これを成し遂げるための討論を深めて、成案を得たならば一致して果敢に行動に移すことが肝要である。

この意味において、医学部の今回の試みが、改革のよい推進役を果たすことを切に望むものである。

(いない・こうき)